アヴダーナ文學就にて

高畠寛我

佛の說法、固よりその內證に發す、佛の主とする所は、形式によらず、他律によらず、如實に法の生活を自らに體現するにあり、法の實行にあり、この故に佛の說く所、抽象の論議を事とせず、端的に具象の事實に法を見るにあり、これを以て原始佛典は、多く具象的表現を說法の形式となし就中、一般に對しては多くの譬喩を以て之を勸發誘導し、其敎理を直截に發表したり、佛は常に諸種の譬喩說話をとりてそを換骨脫體し、以て甚深の敎義を卑近簡易に說示したるなり、これ實に佛陀說法の一特色となす、而も印度は古今東西を通じて最も譚話に富める國なり、かゝれば滅後、次第にこの方面が開展し、其業說と結合して佛敎の生命を發揮し、その敎化を裨益せるの甚大なるは怪しむに足らずかくて膨大なる本生文學を形成し佛陀觀の發展に伴ひて之を達成せしめたるは疑ふべからず、而して本生文學が主として南方に發達したるに對しこれと同種の文學にして主として北方に發達したるはアヴダーナの一類なり、同種なりといふも、前者は佛の前生を譚化したるものに對し、後者は、佛に限

らず、諸の衆生が覺位に進む歴程を譚化したるをその特色となす、このアヴダーナ文學は本生文學が其數甚だ多くして史上に活躍したるが如きにあらざるも亦其數尠少なりとせず、且つこれらアヴダーナの中には當時社會の民俗、風習等の文化狀態を窺知する資料となるもの少なからず、又、文學史上の地位より見るも、原始佛敎より大乘敎典に至る過程中にありて一橋梁たるを失はざればこれら諸種アヴダーナの研究は興味あることなるべし、今且らくアヴダーナに關する材料を紹介するに當り、諸家の觀察を一瞥せん。

アヴダーナの意義

アヴダーナとは因緣談をいふ、支那にては譬喩又は出曜と譯せり、十二部經の第七にして卑近なる譬喩又は寓言を以て深妙なる敎理を詮顯せる部分をいふ、智度論三十三には與世間相似、柔輭淺語とし、瑜伽論二五には云何譬喩謂於是中有譬喩說由譬喩故本義明淨是名譬喩と大乘河毘達磨集論には何等譬喩謂諸經中有比況說と法華文句五には譬者比況也、喩者曉訓也、託此比彼寄淺訓深乃至動樹訓風擧扇喩月、故言譬喩と、又華嚴疏抄二一には、一には深喩の爲に似て說きて眞を解せしむるが故に、二には淺識の爲に彼に就き類を取り誘うて信せしむる故にと、以上は阿波陀那卽ち譬喩の支那に於ける解釋なるが飜つて西人の方面を見るにホッヂソン氏はアヴダーナを定義して。

It treats of the fruits of actions or moral law of mundane existence'

となす、この定義は實習的に正しきもビユルヌフ氏はこはアヴダーナの眞意を傳へ居らずとしてアヴダーナは legende, récit legndaire なりと而して曰く、

Ces légendes roulent dordinare smrces deux sujets, lèxplication des actions prèsentes par les actions passées, et lànnonce des rècompenses on des peines rèservèes ponr lávenir aux actions prèsentes.(佛教史序論579)

次に、フエール氏はギメー博物館報ノアヴダーナシャタカの序文に於てアヴダーナを lègende, action héroïqne と譯するは眞正の譯に非ず寧ろ支那の譬喩の方がより正確なりと述べ、出曜は可ならずとし、因緣は都合よき譯なるも既に十二分敎の第六位なる「ニダーナ」に當るものなることを指示し譬喩を以てより勝れたる譯なり、餘り範圍の廣過ぎる感あるもこの語は同時に Comparaison, làpologne làvadana の三意義を現はすものにしてこの三者は類似せるも同一の者にあらず、而して氏は更に進みてこの比喩を基礎とする fable とアヴダーナとの區別を論じ居れり、即ち曰く fadle は本來或は專ら印度發生の者なるが佛敎に於てはその固有の形式にては顯はれず、アヴダーナの形式に依りてのみ顯はる、さりながらアヴダーナは fable に非ず fable の作者は遠き昔、長頸と長嘴とを有せる鳥が狼の喉にありし骨を引き出しゝが狼はこれに對して彼れの苦痛に報ゆるに非理と脅喝とを以てせりと說明す、これは即ち fable にして吾人の處世方法に對し、指導的に忠告を與ふるものなり、然る

にこの話が或る人物の口に置かれて、鳥は彼自身なり、狼はよからぬ性質の自己の從兄弟なり而して今日の彼等の關係は過去の彼等の關係の連續或は結果に過ぎずと附加せらる、そこに吾人は全く他の程度の他の性質の教訓を受くるなり即ち年數を經過して及ぼす運命を示す、換言せば吾人の運命を支配し規定し決定する前生の判斷そこに即ちアヴダーナを見ると氏はこの立脚地より進んでアヴダーナを定義して次の如く云へり、

La definition la plus arge de lavabana devient alorscelle-ci: avadana est nne instrnction pui demontre, par les faito, le lien pui existe entre un acte et sa eonseqnence inevitable. (ギメ　博物館報18XIV)

即ち「アヴダーナとは出來事に付てある行爲と其の避け難き結果との間に存する因緣を示す所の教訓なり」と

この定義はアヴダナナの內容より見て下しゝものなるが次にスパイエル氏は百緣經の序分に於てアヴダーナなる語は佛教以外にては illustrious actions and feats を現はす爲に用ゐらるゝことを述べカーリダーサ、ダンディン、ターラナトハ、等の作物を引用して之を證明し、又、本生鬘の中に於ても glorious performanee の意味に用ゐらるゝが故にその初めはより廣き意義を有せざるべからざることを示せり、又、アマラシンハの辭書を引きてその中にアヴダーナを佛教の通用語中に置きて karma

vrittam 或は bhūtapūrvain carifram と註すといへり、又、氏はパーリのアパダーナと比較して兩者は共に dā+,ava,apa, より固有の意味にては「切り取られたる者」「選ばれたる者」なりしが普通に用ひらるゝに從ひて特に、notoions, facto' facinora を意義ずることゝなり特に善意にとられて illustrions, glorions achievements に用ゐらるゝに至れり、尙佛敎にてはより一般的の意味がその名を有する物語の內容に用ゐられ、即ち惡行惡果が百緣經のある物語の寓意をなせりと

以上アヴダーナの意義を概觀せるが支那譯の譬喩は適當なるも廣義廣漠にて內容を正確に示し難く、尤も單に物語と譯するよりは勝れるがその內容の定義としては右のフェール氏の說、最も要領を得たり、これを以て見ればアヴダーナは、因緣談又は詳しくは譬喩因緣談と云ふを適當とすべきが如し、スパイエル氏の語源論は斷じ難く、榊博士の說に依ればアヴダーナは uddāna の ud+dai+na なると共に ava+dahi+na とすべきを至當とす。

アヴダーナの構造

アヴダーナはその內容の性質上特殊の構造を有す今フェール氏に依りて之を述ぶれば次の如し。

過去と現在との關係より見ればアヴダーナは過去に於てなされし行爲を現在生活に結ぶ因緣を明瞭に現す處の敎訓なりこの故に凡てのアヴダーナは本來二個の物語よりなる、實際の出來事の物語とそれを決定せる過去の出來事の話となり而して過去の事柄を完全に知る事を要する第二の物語は普通の人

にはなす事を得ず、かくの如き記憶を喚起するを得るは全知の佛陀に外ならず佛陀は元來師なるを以つて其の說く處の說明は訓戒に富み居れり、この故にアヴダーナは四部分より成立す。

1、序　　言――佛の住所を知らしめて多少共之を稱揚する序言。

2、現在の物語――ある說話者によつて爲さるゝもの。

3、過去の物語――現在の物語の說明にして佛によつて爲さるゝもの。

4、結　　論――佛が證人として來る事件或は佛が思ひ出す追憶の場合に於て佛に依て與へらるゝ敎誡。

この寓意に從ひて作られし物語が佛敎文學中に多數に存在す、これ即ちアヴダーナなり。

次に佛は自己の過去のみならず他人の過去をも回想し得ざれば時としては自己の關與せし事柄につき時としては自己の關與せざる事につき物語るもその樣全く自然なり然れどもこれを敎徒の側より見れば結果に於て非常の差あり佛が混入せる物語に付ては佛の物語と混同する事を得ずそこに特殊の名稱を附せらこの種のものは即ちヂャータカと呼ばるゝものなりこは十二分敎の第八位を占むるものなるがこれに屬するものは佛敎文學に於て非常に多數なり北方佛敎に於ても存在するも特に南方佛敎の一部を形成する事は周知の事實なり。

さればヂャータカがアヴダーナに異らざる事は明なり而してこの兩者の異點は後章に於て再び論ずる

處あるべきもその主なる點を言へばヂャータカに在りては菩薩が dramatis personal の一ならざるべからざる事を要すされどアヴダーナは爾らず他の人物にても可なり併し吾人の多數のアヴダーナは亦菩薩の人物を含む故に凡てのヂャータカはアヴダーナと云ひ得るもこの逆は則ち眞ならず。

次にアヴダーナとヴヤーカラナとの關係を論ぜんに先に吾人は現在は過去の所產と觀察せらるゝ事を述べたり現在が過去の所產なれば現在は亦未來の產者なり今日の事件が過去の結果なると同じく現在行爲が未來事件の原因たるべし、全知の佛陀は鏡中に物を見るが如く、過去を見又未來を知る、この故に現在を未來に連絡する一聯の敎訓あり、卽ち過去の物語が未來に對する豫言を以て、代置せらるゝものが存在す、これはヴヤーカラナと呼ばるゝものにして十二分敎の第三を占む併しながらそは單に豫言の意味ならずして正しく莊嚴なる說明又は宣言を現はすものにしてまた豫言ならざる佛の宣說に用ひらるゝを見る、されど豫言を含む特殊の引離されたるものが、アヴダーナ中に現はるゝなり且つヴヤーカラナに一致する語がその texts 中に存在す凡てのヴヤーカラナは predition に非るも凡ての predition はヴヤーカラナなりこの意味にヴヤーカラナを取る時はヴヤーカラナは亦アヴダーナの特殊の塲合と外ならずアヴダーナの變調の類と云ふべし。

次に實際行爲に關して時としては過去の記憶を喚び時としては未來の秘密を記剄する佛は互に同時に彼の二重の知識卽ち彼の過去の事柄の記憶と未來の事柄に先づ憶念とを示す能はざるやと云ふにこの

場合は屢ならざるもそは顯れ居れり、吾人は過去時の話が未來の predictin にて二重にせられ居る所のものを有すそは特別の名稱を有せざるもアヴダーナ非アーカラナ、或は混合せるアヴダーナと呼ぶべきなり。

次に過去の喚起と未來の先見とは普通に非常に長き時間を有す何となれば佛は非常に遠く前後を見るを以てなり然らば行爲の結果を生ずる爲にはかく長時間を要するが佛敎にありては千萬年の長時間を考ふる事を喜ぶに拘らず又短時間の因果をも論ずるなりされば過去の物語も豫言もなけれども非常に短時間一屢今日と明日との間に於ける刑罰褒賞より成れるものが存在すかゝる類は呼んで現在のアヴダーナとなすべきなり、而してこの物語はアヴダーナの普通の plan が少し變化され居るなり。

以上吾人の論ずる處に依りてアヴダーナに五種の類型を考へ得べし。

1、固有のアヴダーナ卽ち適去のアヴダーナ、

2、アヴダーナ非ヤーカラナ卽ち本生類、

3、現在のアヴダーナ、

4、未來のアヴダーナ、卽ち非ヤーカラナ、

5、混合せるアヴダーナ、卽ちアヴダーナ非ヤーカラナ、

以上主として、フエール氏の意見に從ひてアヴダナーの構造及びそれに起因する類型を述べたり次に

アヴダーナとヂャータカとを比較せんとす。

ヂャータカとアヴダーナ

先に少しく述べしが如くアヴダーナに於ける dramatis personael が菩薩なる時これ即ちヂャータカなるを以てヂャータカは即ちアヴダーナの一種に過ぎず而して又事實上かのヂャータナマーラーは菩薩のアヴダーナマーラーなる呼樣を有す。

アヴダーナ及びヂャータカは共に佛教宣傳の爲に用ひられたる說教の一樣式なり而して又彼等は教義の性質に於ても一致するなり兩者の重なる傾向は一方凡ての有情に對して不斷止まざる輪廻の無限界に於てその存在の課程と運命を決するに關し karma の拒むべからざる力を示し他方聽者をして善行爲（自行爲）の實行に依り未來に於て貴重なる結果を有すべき cuklam karma を貯ふべき有情の個ての力を信ぜしむるに在るなり彼等はこの教義を普通の人とに宣傳する爲に神々の卑近の例を用ひて作られたる物語にしてそこに採用せられたる著しきものは佛徒の發明に係るものにあらず民俗傳說或ば古き物語より引入せられしものなるが其物語の源泉に付て印度に於て特に發達せるものにして泰西學者をして譚の國と呼ばしめしも至言とすべきなりこの印度固有の物語を採用して彼等の教義主張等に必要に應じて適用せしめしものなれば婆羅門教の書冊に保存されたる多くの古き神話傳說等は又佛教の衣裝を借りて多く出會はるの處なり。

次にヂャータカの構造にありてもアヴダ！ナと同じく現在の話と過去の話とより成るものにしてこは既にリスデビッド氏に依りて區分せらるゝ處なり (Buddhist India,p,194) されどアヴダ、にありては過去の話が未來の話即ち井を以てャーカラナ代置せらるゝものあれどヂャータカに於てはかゝる型は見出されざるなり。

次に兩者の相違する處は其物語中に現はるゝ處の光榮ある行爲がヂャータカに顯はるゝものより些細なること柄が多く創造され居る事なり斯の如き些細なる事はヂャータカ本來に在りては稀に見る處なりとす、所謂菩薩の英雄的行爲としては或は虎に其餌食として自己の體を與へ或は眼、肉、血、頭等なそを要求するものに與へ或は妻子を其乞ふ處の者に與ふ處の犧牲的行爲なるが菩薩ならざる普通の人々にはそれより小なる事柄をもつて代らしめ得るなり、即ち僧伽への寄贈、師僧又は其弟子達への香、花油、金銀、寶玉等を贈り裝飾修繕を成し又 Stupas,caityas 等の建立等要するに寺院僧侶への恩惠的行爲が相當の功績を作りアヴダーナ物語に於て稱揚せらるゝ價値あるなり而してかゝる場合にはその種の行爲によりて齎らせる功業の果實が記述され居るなり又かゝる善行に反してアヴダーナ物語は時としては同じ型の惡行特に托鉢僧に對する貪慾にして亂暴なる行爲や慈善と犧牲とは全く反對なる殘酷と流血、長者に對する尊敬の欠乏、無禮の語、誹謗等の如き非行貶し烙印付くる爲に monumentum aere perennius を築き居れり而して之等善惡の行のもたらす善惡の結果の指摘する事の顯著

る事は嚴密の意味にてアヴダーナ文學を特性つけヂャータカより之を辨別する著しき標準の如くにしてにはかゝる傾向なきなり。

アヴダーナの分類

ヴアダーナ中に物語らるゝ物語はアヴダーナ特有の者なるかと云ふに然らずこれはヂャータカにつきても然るが元來この兩者は物語なる衣裝の下に宗教的教訓と道德的竝びに生活規定の教義を含有するものなるを以て其物語に經藏律藏等に於て屢々說明的例證として發見せらるゝなり今アヴダーナのこの點を觀察せしにシャヴン又は Fables et contes l'inde extraitsdudi Iripitaka chinois として漢譯譬喩經等を紹介し印度の原典の今は存在せざる事を述べヒューバーはデ弁アヴダーナの中十八だけを漢譯の有部の律に發見せらるゝ說話と一致せしめ殆ど同時にシルヴンレビー氏は「デ弁アヴダーナの構成要素」に於て同一の結果に達せしのみならず又他の多數が漢譯の律部に一致せしめその總數卅八の中二十九アヴダーナが原典の弁ナヤより借られし如く尤もその原本は今存在せず（榊教授は Giryav の翻譯序文中にこの一致を譯出せられたり六條學報）この親和の點につき既にビユルヌフ氏カウエル氏等が豫想し居る事は誠に其功勳の赫々たるものありアヴダーナ文學に心血を注ぎたるフエル氏がこの點に於てビユルヌフ氏と意見を異にせしは（百緣經 XIP）遺憾なるも氏も亦西藏の甘珠の律部がアヴダーナ型の原典を含むと云ふ貴重なる序述をなせり次にアヴダーナ又經藏に含まれ居れり其にありて

はパーリにアパダーナとしてクツダカ、ニカーヤに含まる又支那西藏の經藏にも含まるゝがこれに付きては章後に述ぶべし。

斯の如き以上の觀察よりアヴダーナは二群に分つ事を得。

1、并ナヤに含まるゝもの——時に又は經藏に於ても——こゝにてはアヴダーナは教誡に對する例語として現はれ或は其教誡の起原及び其起りし事情に對する外見上の歴史的理由を說明す。

2、獨立せるアヴダーナ　及び其集

これは經藏の中に存在す。

この二は佛教の三藏の一部を形成するを以て之を呼んで經典的アヴダーナとすべし。

而るにこれと內容は同じきも三藏の完成以後に成りし他のアヴダーナ型ありこれは新しき時代のものあり卽ちアルヤシユーラのヂヤータカマーラー、クセメシドラの菩薩アヴダーナ、鬘等なりこれは神聖なる傳說より採用して菩薩の功業を忠實に賞揚して新らしく詩的裝飾を施しゝものなり而して同じく教化の目的を以て編せしが彼等は自己の文學的演出と過去の經典的記錄とを區別す、次により簡單なる形式を有する他の詩的アヴダーナマーテーあり彼等は殆ど全く共通のアヌスツブフ調より成るこの點及びその形式に於て彼等は非常に印度教のプラーナ文學に類似す其用語は時としては古典梵語に背く事あるも低度に於ける正しき梵語と云ひ得べし然して其作者ばプラーナの如く一人の作者に歸せ

られざるも過去の權威ある說錄とせらる彼等の多數は阿育王と其精神的指導者なる、ウパグプタとの問答を取扱へりこれに處するものはカルパドルマアヴダーナ、ラトナアヴダーナ、アショカアヴダーナ、ドバービンシャチアヴダーナ、ブハドラカルパアヴダーナ等とす委細は後に論すべし。

以上述べし處を概括すれば現存のアヴダーナ文學を三種に分類する事を得卽ち二個の經典的アヴダーナと一個の藏後のアヴダーナなり。

第一の經典的アヴダーナは戒律或は敎義に關する例話插話の形に於て律と經藏とに發見さるゝものなり斯の如き佳句集が卽ちデヂアヴダーナなり。

第二の經典的アヴダーナは經藏の作成する單一或二集の形に於て存する純粹のアヴダーナより成る梵本にありてはアアヴダーナシャタカ等が之に屬す同じくパーリのアパダーナが全く異種の組織なるも而も韻律的なるも同じくこれに屬す第三の藏以後のアヴダーナはこの他の凡てのアヴダーナ集竝に單一のアヴダーナを含むものにして其範圍極めて廣し現在存するものは專ら存立せしものゝ少部分に過ぎざるが如し。

諸アヴダーナの概觀

諸アヴダーナの中に於て古アヴダーナの一とせらるゝものは、アヴダーナシャタカ(百緣經)なり。

百緣經を初めて歐洲學者に注意を引かしめしはビユルヌフ氏なるがこれに關して特に研究をなせるは

フエール氏なりボメー博物館報(一八九一)に於てその全部の佛譯と重要なる序文とを與へ居れり次でスパイエル氏はその原典を校正出版し又有益なる序文を附せり、漢譯にては支謙譯撰集百緣經は正に之に當るものなれどもその譯は自由にして多くの省略を有し左程重要なるものにあらず、その西藏譯甘珠Mdoの第二十九卷の殆ど全體が二三の相違を除く外全く梵本と忠實に一致す、この百緣經の構造は各十物語を有する十部分より成りその物語の主人公の類似する點に於て各部はその特質を有す、即ち、初めの四部は如何なる行爲に依り佛又は獨覺に到達し得るかを示す物語にして第一の全部と第三の大部分は記別の性質を有しそこには婆羅門、王女、富商、園丁、渡守、少女等ありて敬虔なる行爲に依り佛を恭敬す、そこに奇蹟あり、そのとき佛は常に微笑してこれらの人々の來世に於て佛又は獨覺となるべきを說示す、これに對して、第二及び第四部は本生譚にしてこゝには敬虔有德なる奇蹟的行爲はこの物語の主人公が前生に於ける佛自身に外ならざることを說明し居れり第五部は南傳のペータバッッ卽ち餓鬼事にして尊者目連が餓鬼道に入りて男女の餓鬼の苦を見て彼等にその苦因を問ふ餓鬼は目連に對して佛を非難す、目連、乃ち、彼等に黑業の物語を語り彼等の前生に於て布施を拒絕し又は聖者に對し非難せしものなることを說く、第六部はある敬虔なる行爲に依り神として天に再生せし人、動物等の物語を語る、最後の四部は共に皆河羅漢果に到達する行爲を示す物語にしてその中、第七部の羅漢は凡て釋迦種の出にして第八部の羅漢は非難の點なき婦人第九部は同じく男子、而して第

十部の羅漢は初めは無行に入りその方向に進みしも後初めて敬虔なる行爲に依り羅漢果に到達せる人々を取扱へり。

如斯くこの書の物語はある一定の寓意に依り整頓編集せらるゝのみならず又ある一定の樣式に從ひて物語られ居れり、これは興味ある事實にして例へば、場所の話し方又は說明が一定の樣式に依り正確に同語句を以て諸所に繰返さるゝなり、その二三を例示すれば各物語をもて初まれり。

Buddha bhagavan sukrito gurukrito manitah pujito rajabhi rajamatrair dhanibhh paurailh cresthibhi h-sarthavahairde vairnagaisra kesirasurairgarudaih kinnarajrmahoragairiti

又、各物語は下の語にて終る。

dam avocad bhagavan ātmanaesas te bhiksavo bhagavato bhasitam abhyanandanl·

如斯き慣用句は尙外に多く存しフェル氏はその百緣經の佛譯中に於て二十三慣用句を指摘せり其名目を擧ぐれば下の如し。

一、物語の冒頭の句　二、物語の結末の句　三、佛に對する恭敬の句　四、佛、獨覺、聲聞への奉仕の句　五、白業黑業の句　六、結婚過程の句　七、多幸なる小兒の娘育の句　八、有德なる人の記述　九、富者の記述　十、光榮ある王と其公正　十一、儲兒の方法記述　十二、行爲の結果と輪廻、十三天界に生れしものゝ佛陀への訪問　十四、過去佛の出現　十六、佛身の記述　十七、佛の

完全なる德　十八、佛の全智全能と慈悲　十九、佛の微笑と其記別　二十、讃誦　二十一、誓願（菩提への）句　二十二、預流果への到達の句　二十三、羅漢果への到達の句

これらの慣用句が物語中の共通の場合に反覆使用せらるゝなり、而してこの慣用句は百緣經特有の者には非ず、ディヂアヴダーナも之を共通に有し居れり、而してその兩者の異點は、本書にてはこれらの慣用句は、狀件の具備する限り、殆ど凡ての場合に省略さるゝことなく現はれ居りてそを充分に書寫することが功德ある仕事の如く考へらるゝが如く、かの佛の微笑又は佛の照覽の如き長文の語句をも一語も洩すことなく記述せり、之に反してディヂアヴダーナにありては慣用句は時々省略せられ殆ど終との語句のみありて、yāvad, pūrvavadyavat 等を用ひて省略し居れりされば本書はその記述の詳細と冗長とが話法の特徴といふべく從ひてその物語は本質としては重要なるに拘はらず多くの平凡と退屈とを生ぜしむ弊を免れず、次にこの書の年代に關してはヴシリエーフ氏がその佛教論に於てヨーガチアールヤがこれを佛の最初の教化時代に屬するものと觀察せることを述べ居れり、この事は少なくとも本書の比較的高古のものなるを示すものなるが而もこれが支謙に依りAD、三世紀の前半に漢譯せられ、又一方、この書の第八十三の物語なるヒラニヤバーニに現はるゝ貨幣の年代的研究とに依り、可なり確かに紀元後二世紀に歸せらるゝなり、次に注意すべきは本書の物語の多くは他のアヴダーナ集に繰返さるゝことなり、又本書の二三はパーリのアパダーナ中にも存することを并シテルニツ

ッ氏はその文學史(二二一頁)に述べ居れり、因に本書と結構甚だ類似してその中の物語は本書と共通なる古き作物はカルマシャタカなるがこは梵本を欠き、西藏譯のみが保存せらる。

次に一部分は體系的に百緣經より拔萃せられ、一部分は他の源より取り出されたる一群のアヴダーナ鬘あり、而して其百緣經に關係する部分はその物語を擴張して他の意匠に依りて組織せるもの々如しこれに屬するものは、druma-avad (凡ての望みをかなふる物語)、と Ratna-avad (寶石の物語)とacoka-avad (阿育物語)となり、この三者の比較研究は且らく略して之を百緣經に比するに、これらのアヴダーナ、鬘は百緣經の短かき物語をば擴大と附加とを以て作成せしものにして惟ふに昔の說敎者が百緣經の物語を利用して之を增補し創意を以て傳說に依る新事件を附加し、己が想像をも加へ、苦心して作りたる詩的產物なり、さればその道德的敎訓は非常に延長せられ反覆せらると雖、亦天才的の詩的手腕、聰明なる論法、精練せられたる文章は、時々、讀者の勞に報ゆるものなり、而して百緣經とこれらアヴダーナ鬘との異點は前者の散文なるに對し、こは首僂迦詩體を用ゐ又前者が大體に於て小乘的なるに對してこは明かに大乘に屬す、ラトナアヴダーナに至りては、阿彌陀、又は極樂の名稱さへ出でたり、而して後は其の用語と文體とに於てプラーナ文學を思ひ起さしむ、この點より并ンテルニッツ氏はこれをプラーナ、同時代に置き得るとし、スパイエる氏は紀元後、四百一千年の間に置けり、こゝに注意すべきはこれらアヴダーナ鬘の大乘的色彩を帶ふるをにしてこは當時の大乘敎

徒の手に成りしを示し、彼等が、古き小乘的アヴダーナを敎化的物語の優秀なる作品として之を換骨脫體し、以て說敎の具となしゝや察するに餘りあり、若し如斯きものとすればこれらのアヴダーナ鬘は佛敎史の材料として興味あり必要なるものなるは論なし、其當時の大乘的信仰を有せる信徒の民間信仰が如何なる風に當時の僧侶よりその敎化を得しやを目前に說明する處あるべきなり。

以下デイヂアヴダーナ等諸種アヴダーナを見るべきも長文に亘るを以て後日を期す。